

## へいわななつに

梅雨が明けたと思つたら、もう7月もなかば過ぎ、明日は終業式なんて、早いわねえ。

カレンダーを見ながら、思わずため息ついてしまふ。齢を重ねると時のたつのが早い、なんていうけれど、それじゃ一年が一瞬で過ぎちゃうわね。わたしたちの場合は。

時計を横目で見たら、まだ5時すぎ。ちょっと早いかもしいけど、わたしはお化粧しなくていいのだから、これくらいは、ね。

クローゼットを開けると、今日の服がかかっている。薄いピンクのブラウスに薄青のスカート、それといつもの白衣。中身はそれだけ。自分で用意するからいい、って言っているのにな。まあ、もうしばらくは慣れないのかしら。

着替えて鏡に映したわたしの姿は、いつもの通り

の清潔第一。よし。じゃ、行きましようか。

扉をちよこつ、と開けてまわりを確かめて。それから、わたしは表に出た。目の前には薬棚。振り返ると保健室のロッカー。ぱたん、と閉めれば、いつもどおり。美空小学校の保健室。

窓にかかっている、白くて厚いカーテンを開けると、キラキラした光が降り注いできた。

——あつつい。まだ6時なのに。

長く住んでいる好きな町だけど、この季節だけは里帰りしたくなるわあ。

保健室の先生が、スカートでバサバサあおぐわけにもいかないものねえ。やつぱり。

エアコンの除湿ボタンを押すと、ちよつとだけ涼しい香りがやってくる。芳香剤はやつぱり入れておいてよかった。薬の多い保健室では、あまり入れるとまずいけどね。

生徒用の小さなベッドと、大人用の簡易ベッドを  
確認して、葉やシーツの数をチェックして、それが  
終わるころには、早い先生がやってくる時間になる。

「あらあ？ ゆき先生、いつも早いんですねえ？」

へへえ。珍しい人が一番になったわね。

「おはようございます、西澤先生」

「やゝだあ。ゆゝかですよあ。もう、ゆき先生つた  
ら他人行儀なんだからあ」

いつものことだけど、思わず苦笑いしなくなっちゃ  
う先生ねえ。これが彼女の後輩だ、っていうんだか  
ら、世の中ほんとにわからないわ。

「早くから登校なんて。ずいぶん、頼もしくなりま  
したね」

わたしがそう言ったとたん、西澤先生、保健室  
のとびらにつかまってうなだれちゃった。

「もうちょっとゆっくりしたいんですけどあゝ、生  
徒が来ちゃうんですう〜」

あらあら。

わたしは、がっくりしてる西澤先生の肩を起こし  
て、冷たいタオルで首すじ拭いてあげた。これでも、  
彼女なりに頑張ってるんだものね。

\*\*\*\*\*

「おつはよあございまゝす」

西澤先生が職員室に向かつてしばらくすると、元  
気な声が聞こえてきたわ。

「おはよう、ぼつぷちゃん」

どれみちゃんたちが卒業してから、ぼつぷちゃん、  
保健室によく来るようになったわ。わたしに気を遣っ  
て、人の少ないこんな時間とかにも。

「そつえばばつぷちゃん、西澤先生が担任だった  
わね？」

西澤先生、これじゃ当分鍛えられるわね。

「うん。でも、ゆゝか先生ピアノうまくないんだも  
ん。あゝあ、あたしも関先生がよかったな〜」

ふぶ。今でも人気あるのよね。彼女。

「しかたないわ。』自分のクラスが卒業するまでは』って言って、結婚がまんしてたんだもの」

「そーだけどさ ゆき先生も、いつかなくなっちゃうの？」

かゝるく言ったように見せかけてるけど、わたしにはわかるわ。体が緊張してる。わたしの答えが怖いね。

「そうね。わたしも、ほっぷちゃんが卒業するまでは、見ていたいかな」

微笑んでみせたら、ほっぷちゃん、目をつぶって、  
「ずっと、ずっと、ここにいてほしいな。あたし」

言った瞬間に、しまった、って顔で首を振った。笑顔がちよっと寂しそうだわ。

普通にしていたつもりだけど、わたしも顔に出ちゃうのかしら。

「ま、まあ関先生なみ、なんてもう言わないけど、ゆ〜か先生って頼りないんだよ。なんか、ぜんぶ」

急いでごまかしちゃって♡ まあ、いいわ。話を合  
わせてあげましょか。

「ん〜、そう見えるかもしれないけど 他に、いいところあるわよ」

「ゆき先生、本気でそう思ってる？」  
あはは。痛いところ突くわ。でもね

「人間はね、成長するのよ。魔法がない分、いろんな経験をして。魔法がない分、いろんなことを吸収してね。西澤先生も、それができる——素晴らしいことじゃない？」

わたしはそんな姿を、魔女たちに伝えたかったの  
もちろん、ほっぷちゃんの姿も、ね♡

「えへへ あ、も、もう行かなくっちゃ！」  
そう言って、走って出て行く後姿を見ながら、つ

いつい微笑んじやうわ。  
照れくさそうに、ほっぺたをかく仕草がかわい

た。言ったら怒っちゃうかもしれないけど、お姉さんゆずり、ね♡

\*\*\*\*\*

鐘が鳴って授業が始まると、保健室はしーんと静かになる。

聞こえるのはエアコンの音。そのむこうから微かにセミの声。さっき入れた紅茶は冷めるにまかせて、わたしは今日のお仕事メモを眺めていた。

ほとんど、まっ白。

美空小の保健室は、ここしばらく開店休業。わたしが暇なのはよいことかもしれないけど、子供たちに元気がないような気がして、なんだか悲しくなってしまうわ。

はあ。どれみちゃんたちがいたころは、盛況だったのにねえ

「うきさま、ユキ様？」

あら？

「執務中に、失礼致します」

顔を上げたら、ロッカーの中から知った顔。

「リンじゃないの。昼間に来るなんて珍しいわね」

マジヨリンは一礼してから、ロッカーを音も立てずに閉めたわ。紺のスーツにネクタイなんか締めちゃって、そりゃ『来るなら人間界の服にしなさい』って言ったのはわたしだけど、ねえ？

「ユキ様、あの よろしいでしょうか？」

おずおず、っていう感じの声ではっとした。いけないいけない。ついジロジロ見ちゃった。

なにか言いたそうだけど。まず、今朝のこと言っておかないとね。

「ねえ、リン？ わたしが帰らなくなって、もうじき1年半よね」

「は。人間界ではそんなになりますか」

両手を前で重ねて、背中ピンつ、と張って。服のせいかしら？ いつもより緊張して見えるわ。

「そろそろ、わたしの世話はいいわよ」

ぴくつ、と眉毛だけが動いてる。さすがに動じないか。でも、ひとつ深呼吸してる。これは

「お言葉ですが、今の女王様は歳若すぎまして、私達には仕事がないのです。できましたら、もうしばらくユキ様のお手伝いを」

「ほおらきた！」

「ダ・メ！ もう、そんな付け足しの理由なんか言つたつてしょうがないでしょ？ 本当に仕事ないなんて思つてるの？」

「そ、それはもちろん。一同で協議しまして」

「その『一同』に、ハナちゃん入れた？」

「はあ？」

口をぼっかり開けて、目を見開いて。吹き出さないうようにするの、大変だわ。でも。

「ねえ、女王様に聞きもしないで『お仕事ない』なんて言わないですよ。先代のわたしが恥ずかしいじゃないの？」

リンが両手を握りしめて、わたしに近づいてきた。

「し、しかし、ハナ女王様はまだ3歳で」

めつたにやらない、わたしに抗議するときの体勢。

「だからどうしたつて言うの？ 彼女はこの小学校の、れっきとした卒業生なのよ？」

「私どもに、ままごとに付き合え、と言われるのですか？」

「付き合えばいいじゃないの。もし、それが本当に女王様のお望みなら、ね」

「ユキ様！」

思い切り力を込めて、リンの目がわたしを見てるわ。

わたしは、固くなつてゐる両肩に手を置いて、目と目と覗き込んだ。

「いい、リン。もいちど言うわよ？ ハナちゃんは、小学校の卒業生なの。人間の心は、もう十分だじじにできるわ」

そう、リンにわたしの世話する暇なんかないわ。

「足りないのは、魔女のことよ。普段の生活から、魔女のことを知らないといけないの。それはもう、ハートやミラーが教えることじゃないわ」

リン。ハナちゃんを、立派な新女王様に育てるの

は、あなたたちなのよ

リンは、ちよつとだけ目を伏せて、『はあ』って一言。十分じゃないけど、少しはわかってくれたかしらね。

そう思ってたとき、リンの背中から、また新しい声が聞こえてきた。

「役立たずで申し訳ありませんが、先代女王様」

肩越しにロツカーを見たら、ハートとミラーが並んで立っていた。

\*\*\*\*\*

かける言葉に迷って、ただにこにこしていたら、ハートがひとつ、ため息ついた。

「やっぱりね。来てよかったよ」

まあ。昔から地獄耳だとは思っていたけど、これほどだったの？

「マジヨリンだとつまく話せないんじゃないかと思っ

てね。なんたって、つい最近までおそば仕えしてたんだから」

「それで、ハートと私で参りました。先代女王様」  
ミラーが軽く手を振ってリンを下がらせた。

それにしても、いまだにこの呼び名なのよね、このふたりは。

「堅苦しくって、イヤなのよね。その呼ばれ方」

「我慢願います」

「ピシヤリと一言。あら、これはちよつと真面目に聞かなきゃいけないことみたいね？」

「問題はなあに？」

「はい。実は、マジヨリ力殿なのですが」

ハートが言いよどむなんて、珍しいわ。そんなに大変なことなの？

「わがまま言い始めた？ もう一年半だものね、そろそろとは思ってたけど」

「いえ、普通の意味でのわがままでしたら、元老院がどうとでもします」

「ですが、今回はそうはいかなくて  
まあ、このふたりのこんな苦い顔、久しぶりに見  
たわ。」

「実は、銅像を作りたい、と言い出したのです」

「銅像？ 自分の？」

「ふたりして首を振ってるわ。そうね。もしそうだったら、ハートの一喝でおしまいのはずだもの。」

「それが どれみたちの像を作りたい、と」

あ！

おもわず、声が出るところだった。そっか、それは考えてなかったわ。でも、よく考えればあたり前よ。どれみちゃんたちと、いちばん長くつきあってた魔女なんだから

「内容はわかりました」

自然に、声が硬くなる。たしかに、あきらめてもらうには、わたしが行くしかないかもしれないわ。

「それでは、わたくし」

「そこまで言って、はっ、とした。いいえ、いるじゃ

ない。わたしよりも適任の魔女が！

「わたしに、まかせてくれない？」

ハートとミラーの目が、細くなった。わたしの声が軽くなったのがわかったんだわ。

「大丈夫。でもね ちよっとだけ、目をつぶって

ね♡」

\*\*\*\*\*

3人が帰ってから、わたしは手紙をしたためて、ロッカーの向こうに飛ばした。

彼女のことから、1時間くらいで済んじゃうかもしれないわね。帰ってきたときのために、お茶を用意してあげないと。

薬棚の隅から取り出したティーセットを拭いてると、鐘が鳴った。そうそう、今日の授業は午前中でおしまいだから、彼女の方もそろそろ来るかしら。

「こんにちはあ〜」

あ、こっちが早かったわ。

「ぼつぷちゃん、待ってたわよ」

言ったとたんにポットの沸騰チャイムが鳴って、わたしはちよつと笑っちゃったわ。ぼつぷちゃん、この部屋に愛されてるみたい。

「はい、お紅茶。今日はお昼前なんだから、おやつはなしよ?」

「はい。いっただだつきまゝす」

こくこく、って飲み方、いつもより幼く見えるわ。友達とか他の先生の前だとしつかりものなんだけど、甘えられちゃってるわね。

\*\*\*\*\*

あたしが紅茶飲んでる間、ゆき先生はロッカーの方チラチラ見てた。

知ってるんだ、あたし。あの先は、どつか他の場所 きつと、魔女界につながってるんだ、って。

「ゆき先生は、夏休みどうするの?」

だから、こつ聞けばきつと『魔女界に帰る』って言つと思つたんだ。だけど、

「わたし? わたしはいつも通り。保健室にいるわよ」  
ええっ!?

「海とか山とか、いっぱいあるよ。こくがいやなら魔女界に里帰りとか いろんなく、あるじゃない」

あたしは、あわてて言つてみた。ここにいっばなし、なんて、おかしいよ。絶対!

「魔女界には、行けないわ」

へ? なんて?

「新しい女王様に代わつて、まだ1年半よ。ハナ女王様もマジヨリカも一所懸命やつてるはず。そこに、前の女王があそびにきたらどうなると思つ?」

あ、そつか。

「ブニユちゃんだもんね。ゆき女王様と比べられたら、イヤだよね」

あゝあ。なんだか、イヤなこと思い出しちゃった。



「わかる?」

「うん。あたしもさ、どれみお姉ちゃんによくやられたもん。ピアノだって、魔女見習いだって、あなたの方がうまいのに。みんな、お姉ちゃんの方が好きなんだよ」

ゆき先生、にこにこ笑ってる。もう。

「ゆき先生だって」

言っちゃってから口にくたしたけど、遅かった。ゆき先生、あたしの顔じつと見て、

「わたしが、どうかしたの?」

って、いつものやさしい声で。あたし、つい目そらしちゃった。

しょうがないや。あたしはそのままふざけた声で、

「あゝあ。あたしもほしかつたなあゝ。MAHO堂の力ギ」

お姉ちゃんの卒業の日、ゆき先生にもらったんだって。ずいっとあたしに隠してるんだもん。

「そおお?」

「魔女見習いだったのは同じはずなのに、あたしだけ仲間はずれなんだもん」

くるつ、と背中むけたら、なんだか寒くなった。音が、きえちゃった。

「いいえ。それは違うわ」

思わず、体がちぢまつちゃう。大きいわけじゃないのに、すこく、こわい声だよ。

でも、そおつと後ろ見たけど、おこつた顔はしてなかった。

「仲間はすれなのは、むしろ、どれみちゃんたちの方」

ええっ!?

「そのうち、わたしは恨まれちゃうかもね」

あたしは、首だけ後ろ向いたまま、動けなくなっちゃった。

「——ごめんね、変なこと言っちゃって。どれみちゃんには、ナイショよ?」

「う、うん」

なんだか、今だけ女王様の目になってたような気

がするよ。ほんのちよつとの間だけ、だけど。

「でも、別にここにいないくてもいいじゃん。行くところがわからないなら、伊豆のリリカおばあちゃんのとこでも　そうだ、あたしたちといっしょに海とか、ね」

「ありがと。でもね、ここにいないと困っちゃう人がいるのよ」

困っちゃう？　なんで??

首ひねってたら、ゆき先生の後ろから、ボンッ！　ってすごい音がした。びっくりしてそっち見たら黒いけむりがロッカーからわいてきてる。

「な、なに、これ?」

なんだが、足音もするよ。走ってる音。どんどんこっちに近づいてる!?

「始めたみたい。ふふふ。久しぶりだからって、派手にやってるわねえ♡」

ゆき先生がそつ言いながら紅茶飲んでるところへ、ロッカーから何かがころげ出てきた!!

\*\*\*\*\*

「せ、先代女王様！　お、お助けをっつー!」

ロッカーから真つ黒いのがころがってきて、ぶつかりそうになつたけど。顔を上げたら

「ええ？　プニユちゃん!？」

「おお、ぼつぷか。久しぶ　いや、そんなことを言っている場合じゃないわい。先代女王様あ〜!」

ゆき先生は、机の前で紅茶飲んでる。さっきと同じ、へーきな顔で。

「あら、わたしに頼むなんてお門違いじゃない？　そういうことは、今の女王様にお願いしないと」

「ハナ女王様は手を叩いて喜んでるだけですっ!!」

え？　え？　いったい、なにがどうなってるの？　プニユちゃんとゆき先生の間でおろおろしてたら、また別の声が聞こえてきた。

「マジョリカちゃん。どこに逃げてても無駄ですよ」

「ひ、ひいいっ!!」



「それじゃ、あたしたち過去の人だよ。本当にもう二度と会えないみたいじゃん！ 冗談じゃないよ!! あたしは、あきらめないんだからっ!!」

あたし、ブニュちゃんの首を夢中でゆすつてた。なんでわかんないの？ あたしは、あたしは絶対っ!!

「わ、わしは、みんなを形に

」

「そんな形なんかいらぬ！ あたしは、ハナちゃん忘れないもん。ハナちゃんも、絶対あたし覚えてるもん。形なんか

!!」

ちらつ、と目の端にゆき先生が見えた。手のひらに、金色の力ギ。お姉ちゃんがもらった、MAHO堂の力ギ。

「形、なんか？」

でも、ゆき先生、あたしの目を見ながら、ポケットにしまっちゃった。

そっだよ。これも、形なんだ。魔女界とあたしをつないでた、形。

急に力が抜けるのといっしょに、ドサッっていう

音が遠くから聞こえた。

ブニュちゃんがゆっくり立ち上がって、リリカおばあちゃんたちに頭下げてるのが、なんだか別の世界のことみたいに見えるよ。

でも、ブニュちゃんがロツカーに消えるとき、あたしに言ったんだ。『それじゃ、またな』って

「パトレイ又より、ぼつぷちゃんの方が強かったみたいね」

閉まっちゃったロツカーをぼつと見てたあたしの肩に、ゆき先生の手が乗った。

「それはとても素敵なことよ。ちがう?」

反対側の肩には、リリカおばあちゃんの手。ああ、これも覚えてよう。いつか、またみんなに会えるときまで

「でもねえ、リリカ?」

あたしの肩に手を置いたまま、ゆき先生が軽い声で言った。

「むかしみたいな、ドッカーン！って暴れるあなたを生で見たかったわぁ♡」

ど、ドッカーン？生で？

おそろおそろ見上げたら、ゆき先生がにこにこ笑ってた。ちよつとだけ、ほつぺた赤くして。

「カッコよかつたのよぉ。むかしのリリカは♡」

これが、あの、女王様。この1年で、わかつたつもりだったけど、つもりだったけどおぉ

「ど、どうしたの、いきなり泣いたりして」

肩に置かれた手の重さが、なんだか悲しくなってきた。

「いいんです。泣かせてくださいいい」

\*\*\*\*\*

ぼつぷちゃんを見送ってから、わたしは保健室のドアに鍵をかけた。

ぼつぷちゃん、泣き止んでもまだちよつと青い顔

してたわね。わたしが声かけたら、大丈夫って繰り返してたけど

エアコンを消したとたん、聞こえてきたのは鈴虫の声。でも、それも厚いカーテンを引くまでのこと。しん、とした保健室のあちこちを指差し確認してから、わたしは明かりを消して、ロッカーを開けた。振り返ると、薄暗い保健室。いつもと変わらない部屋が、いつもと変わらない顔で見送ってくれる。ちよつとだけ伸びをしたら、自然に言葉がこぼれてきた。

「ああ、今日も平和だったわ♡」

—おしまい—